

[特別連載]
12月定期演奏会



The Excursions of
Mr. Brouček
vol.2

フス派の闘い

1420年7月14日

薩摩秀登

明治大学教授(ヨーロッパ中世史)
Hidetō Satsuma

「ジシカがジクムントを打ち負かしたのは1420年と学校で習ったぞ!」
プロウチェク氏は第二部第一幕でこう叫ぶ。こんな古い年代がとっさに出てくるものかという気もするが、学校でよほど先生に叩きこまれたのだろう。確かに1420年7月14日という日付は、チェコ人の中で特別な意味をこめて記憶されてきた。この日、神聖ローマ皇帝ジクムントが率いる軍を、貴族、市民、農民からなるチェコの軍がプラハの目前でさんざんに打ちのめしたのである。どうしてこのような事件が起こったのだろうか。

チェコは9世紀にさかのぼる伝統ある王国だが、形の上ではドイツを中心とした神聖ローマ帝国の一部であった。そして14世紀から15世紀初めにかけて、チェコ王カレル4世やヴァーツラフ4世は神聖ローマ皇帝も兼ねたので、プラハはヨーロッパ有数の大都市となり、政治的にも重要な街になった。しかし一方で、当時はローマ・カトリック教会が莫大な財産を抱えて絶大な権力を振りかざし、社会に深刻な影響を与えていた。

この街で1400年頃から、神学者でプラハ大学教授でもあるヤン・フスが説教師となって市民に語りかけていた。「人々はみな、神の掟に従って正しく生きなければならない。最後の審判が下るときに皆が天国へ行くためには、それ以外に道はない。特に聖職者は人々の模範となるように心がけるべきだ。人々は、間違った聖職者に従う必要はない」と。こうした批判は中世ヨーロッパ各地で繰り返されてきたものであって、フスだけが特別だったわけではない。しかしフスの説教は大変な評判となり、支持者たちは教会におしにかけて高価な財宝を奪い取ったり、評判の良くない司祭を追い出したりしたので、チェコは騒然とした状況になっていた。フスは民衆をまどわして反逆へと駆り立てた張本人とみなされ、1415年7月6日、南ドイツのコンスタンツで異端者として火刑に処せられた。ただしフス自身は、決して自分は教会に反逆しているつもりはなく、あくまでキリスト教徒としての正しい信仰を説いているのだと主張し、最後まで自説を撤回しなかったのである。

フスの処刑は支持者たちの態度を一層硬化させ、彼らは事実上、フス派と呼ばれる独自の宗派を形成することになった。聖体拝領の際、通常のローマ・カトリック教会では一般信徒にはパン(すなわちキリストの肉)だけが与えられるのに対し、フス派の教会ではブドウ酒(すなわちキリストの血)も与えられたので、聖杯が彼らの旗印となった。彼らは、長い時間がたつうちにいつの間にか本来の教えから逸脱してしまった教会から華美や虚飾を取り去って、使徒たちが生きていた時代の純粋な姿を取り戻そうという理想に燃えていた。一種の原理主義集団と呼んでもよいだろう。しかし彼らのうち、プラハの神学者たちや裕福な市民たちが穏健な改革を求めていたのに対して、聖書だけに従って生きることをめざし、それ以外の権威を認めようとしない急進派もいた。彼らはチェコ南部のターボルという要塞都市を本拠としたのでターボル派といわれる。両者は時に激しく対立しており、その様子はこのオペラの中でも、兵士たちが交わす論争において巧みに表現されている。

この緊迫した状況の中で、1419年8月にヴァーツラフ4世が継承者を

残さずに急死した。とりあえずフス派はプラハで暫定政権を組織し、先王の弟で皇帝でもあったジクムントに、フス派が正しいキリスト教徒であることを認めてくれるように要請した。しかしジクムントは拒否し、逆に「異端を容認するくらいならばお前たちの国を滅ぼしてやる」と宣言して、フス派討伐の十字軍を率いてプラハをめざした。皇帝の立場にある者としては当然の行動である。各国から精鋭の騎兵軍団を集めたジクムントは、チェコの異端者どもをひねりつぶすくらい、大して難しくないと考えていたであろう。

しかしこの危難にフス派は団結し、ターボルからは名将ジシカが救援に駆けつけた。1420年7月14日、市の北側からヴルタヴァ(ドイツ語でモルダウ)川を渡って総攻撃をしかけたジクムントに対し、プラハの東にそびえる丘に陣取ったジシカ率いる軍勢が側面から襲いかかり、皇帝軍はまさかの大敗北を喫したのである。

オペラで描かれるのはフス派がこの劇的な勝利に酔いしれるところまでだが、戦いの結果は重大だったので、その後のことにも触れておこう。皇帝軍を追い返したチェコでは、正式にフス派の政権が誕生した。ジクムントは何度も彼らを撲滅させようと軍を送り込んだが、そのたびに惨憺たる敗北を喫した。ジシカは1424年にベストにたおれる直前まで軍の先頭に立ち、負け知らずの将軍として勇名をとどろかせた。結局、ローマ・カトリック教会側は、この異端者たちを滅ぼすことをあきらめ、穏健派を抱きこんで和解に持ち込んだ。そしてターボル派に壊滅的打撃を与えて、1436年ようやく戦争を終わらせたのである。プロウチェクの自慢話にも登場するヤン・ロキツァナは、1420年の戦いの時点ではまだ20代前半の無名の聖職者だったが、後にフス派によってプラハ大司教に選ばれ、戦争後のフス派を指導した人物の一人である。ジクムントは終戦とともに正式にチェコ王としてプラハに迎えられたが、その翌年に69年の生涯を閉じた。

こうしてチェコでは、フス派が優勢な時代がしばらく続いたが、17世紀になるとカトリック側の巻き返しが成功し、フス派を含めたプロテスタント諸派は禁止された。彼らの存在が再び注目されるようになるのは、19世紀にチェコ人が自分たちの民族にも偉大な過去があったことを強調するようになってからである。チェコ人としての強い自覚を持ったチェフのような作家にとって、フス派の戦士たちはまさに民族の英雄にほかならなかった。

だが現在では、フス派の闘いをそのように民族の視点からとらえるのはあまり正確ではないとされている。ローマ・カトリック教会の刷新は、15世紀ヨーロッパの人たちが等しく直面する問題であったし、たとえばドイツ系でありながらフス派の優れた指導者になった人物もいる。逆にチェコ系でありながらフス派に全く共感を示さなかった人たちも、ごく普通にいたのである。

しかしこのオペラを楽しむには、この点にあまり深く立ち入る必要もないだろう。ヤナーチェクが15世紀の決戦当日のプラハをどのような迫真の音楽で表現したか、ぜひとも注目したいところである。



ヤン・フス像(プラハ)

第573回定期演奏会
2009年12月6日(日)6:00p.m.
サントリーホール

ヤナーチェク
オペラ「プロウチェク氏の旅行」

第1部 プロウチェク氏の月への旅
第2部 プロウチェク氏の15世紀への旅
(日本初演、セミ・ステージ形式、チェコ語上演、字幕付)

指揮=飯森範親
演出=マルティン・オタヴァ

プロウチェク
ヤン・ヴァツィーク(Ten)
マザル/青空の化身/バツシーク
ヤロミール・ノヴォトニー(Ten)
マーリンカ/エーテル姫/クンカ
マリア・ハーン(Sop)
堂守/月の化身/ドムシーク
ロマン・ヴォツェル(B.Br.)
ヴェルフル/魔光大王/役人
ズデネク・ブレフ(Bass)
詩人/雲の化身/スヴァトブルク・チェフ/ヴァチェク
イジー・クビーク(Br)
作曲家/竖琴弾き/金細工師ミロスラフ
高橋 淳(Ten)
画家/虹の化身/孔雀のヴォイタ
羽山 晃生(Ten)
ボーイ/神童/大学生
鶴木 絵里(Sop)
ケドルタ
押見 朋子(Alt)

合唱=東響コーラス 合唱指揮=大井剛史
●発売中
S¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 C¥5,000
TOKYO SYMPHONY チケットセンター
044-520-1511